

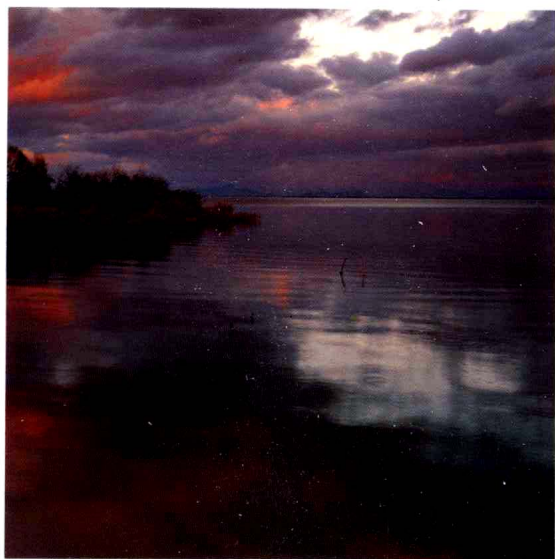
万葉の歌

8

人と風土

中西進企画

広岡義隆著



滋賀

保育社

人と風土

中西進企画

三重大学助教授 広岡義隆著

万葉の歌

8

滋賀

保育社

万葉の歌—人と風土— ⑧ 滋賀

昭和61年 5 月20日 印刷 定価 1,400円
昭和61年 5 月31日 発行

著 者 広 岡 義 隆
発 行 者 今 井 龍 雄
発 行 所 株式会社 保 育 社

〒540 大阪市東区上町 1-17-13

電話 06-762-1731 (代)

振替口座 大阪 6-12346

〒170 東京都豊島区南大塚1-1-2

電話 03-944-3581 (代)

印刷 / セブン印刷株式会社

用紙 / 日本加工製紙株式会社

王子製紙株式会社

© 1986 広岡義隆

落丁本・乱丁本はお取り
替えます

ISBN4-586-70008-4 C0392 ¥1400E

PRINTED IN JAPAN (NDC 910.8)

さざなみのなかで

近江の湖には、はかなさとかなしさがある。華やかな大津朝の雅宴さえもかなしいものに見えてくるのは、歴史のなすわざであろうか。花火のような興亡ゆえであろうか。いやまた湖からくるさざめきのためであろうか。

湖国を舞台にした今の世の作品に水上勉の『湖の琴』がある。主人公「さく」には、まるで湖の精であるかのような悲愴感が漂っている。青い湖の静謐がある。そういえば井上靖の『星と祭』も、「みはる」が湖に沈んだところから始まっている。

万葉も今の世の作品も、私たちをとりまきとりこむ風土から離れては語れない。風土とは水や風である。そして土と人である。そのなかで人はどのように「文学」を展開していったか。大津朝の人々は、人麻呂は、黒人は、官人は、流されびとは……

本書は文学表現を視座にして、鳩の湖を漕ぎめぐった。写真・地形図・風土説明、

全ては歌びとがいかに感じ、どのような思いで作品化したかという一点に結ばれなければならぬ。そう思つて筆を運んできた。

私の知人の作に次のような歌がある。

あかねむらさき色濃き湖の夕もやに家さす舟の影速くして

(佐藤良和)

蒲生野を越えきて深まる近江路の冬ざれの眼路に湖光る見ゆ

(宇田 正)

ともに文学とは直接縁のない職業の人であるが、万葉文学は深く濃く影を宿している。

学生時代、古書店で一冊の本を求め、下宿で読みふけていた。額田王の紫野の歌の頁にカトレヤの花弁一枚が押されてあつた。新しい押花ではなさそうなのに、西洋のその花は紫もあやに匂つた。

万葉は市民の文学、このさざなみの文学を広く江湖に送りたい。

伊良湖・神島・答志島が望める研究室にて

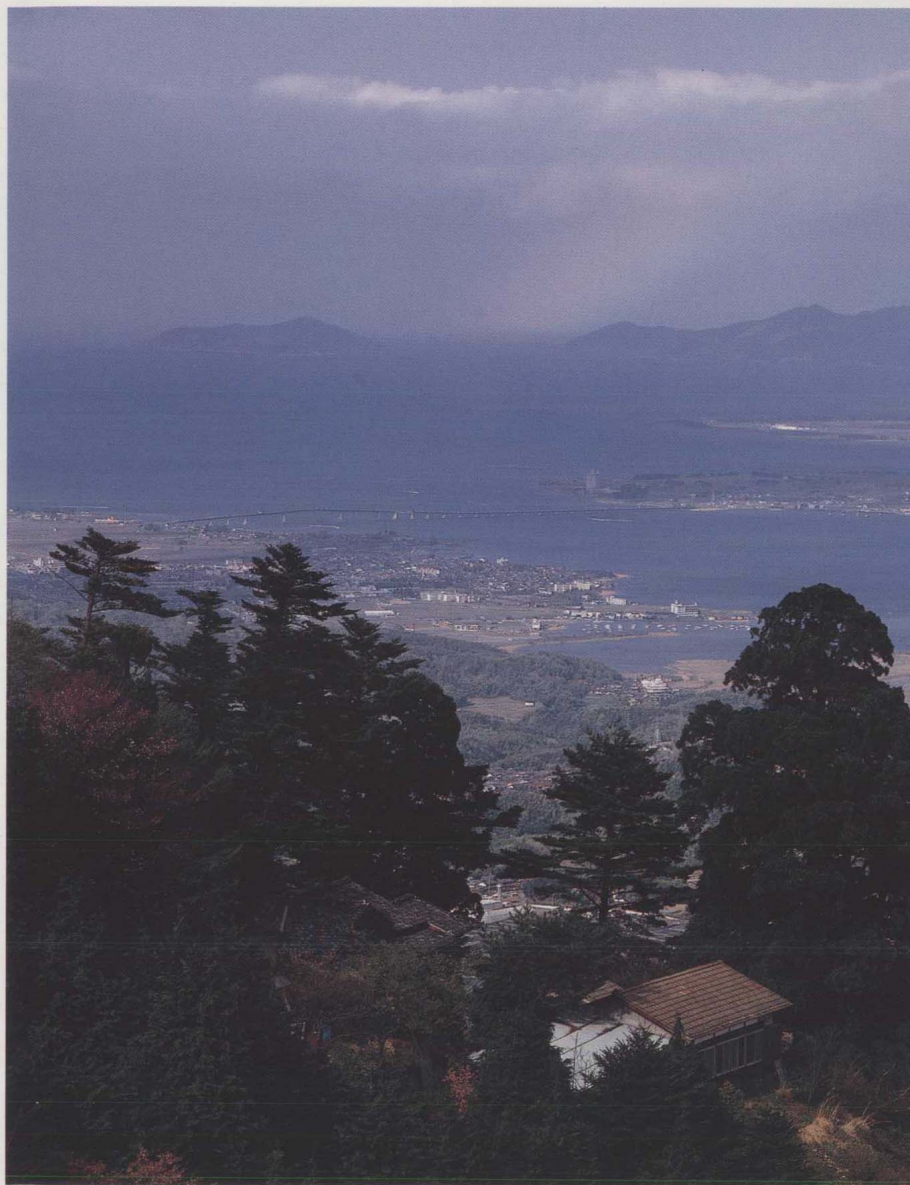
やすみしし
わご大君おほきみの
恐かしこきや
御陵みはつか仕ふる
山科やましなの
鏡かがみの山に……

額田王ぬかたのおほきみ(卷二一五五)



天智天皇陵





比叡より南湖を望む



弘文天皇陵付近

ささなみ
楽浪の

おほやもり
大山守は

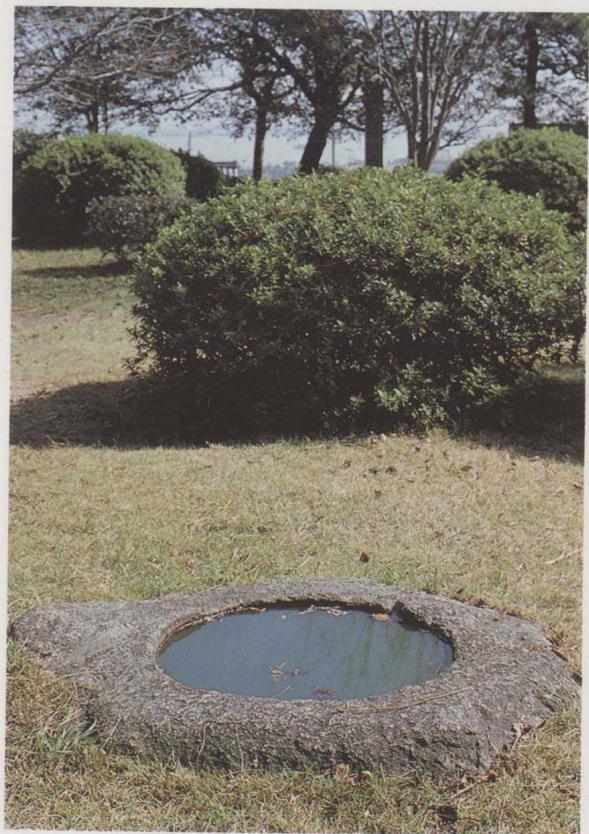
た
誰がためか

しめゆ
山に標結ふ

君もあらなくに

いしかのぶに
石川夫人

(巻二―一五四)



南志賀廃寺



後^{おく}れ居^ゐて

恋^{こひ}ひつ^つあ^あら^らず^ずは

追^おひ及^しか^かむ

道^{みち}の隈^{くま}廻^まに

標^{しめ}結^ゆへ我^わが背^せ

但馬皇女（卷二一一五）



志賀山寺(崇福寺址)



唐崎から草津方面を望む

楽浪の
ささなみ

志賀の唐崎
しがからさき

幸くあれど
さき

大宮人の
おほみやひと

舟待ちかねつ

柿本人麻呂
かきのものひとまろ

(巻一—三〇)



楽浪ささなみの

比良山風ひらやまかぜの

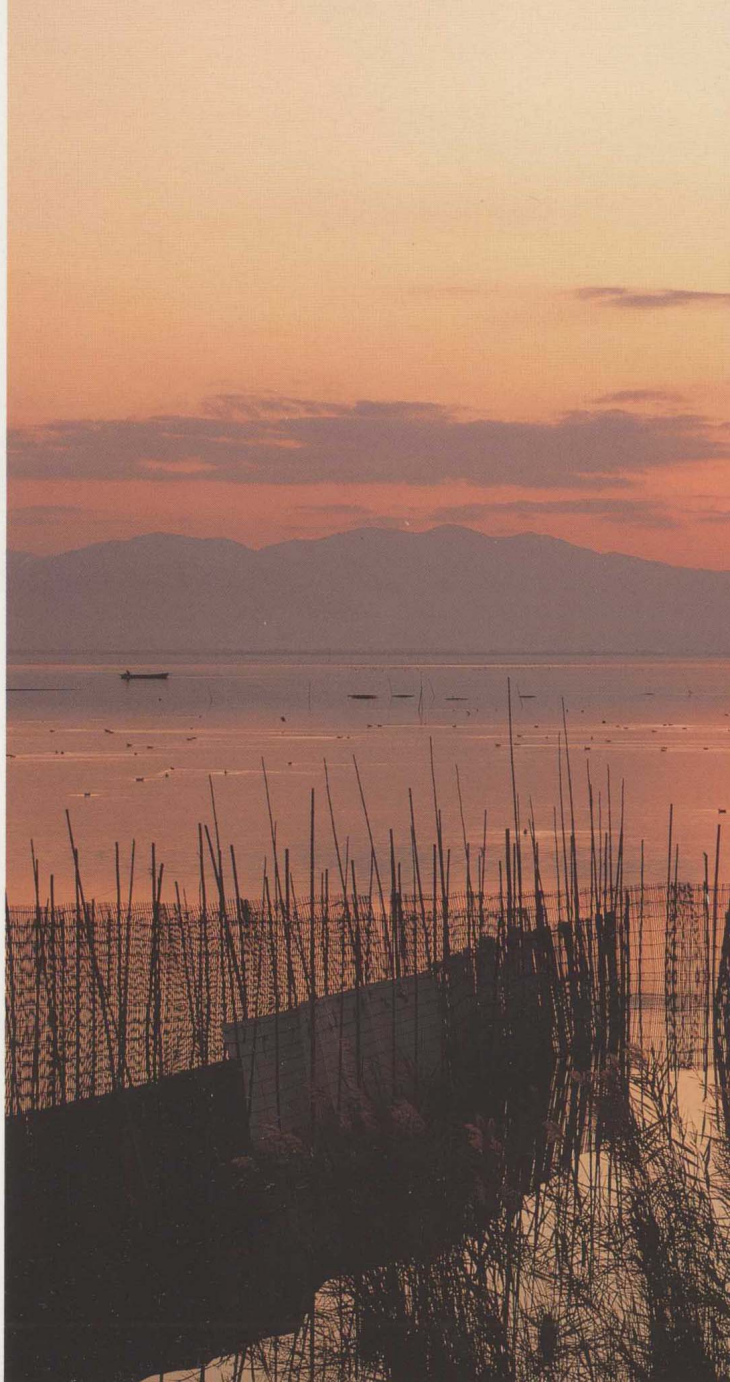
海吹けば

釣する海人あまの

袖反そでかへる見ゆ

(巻九―一七二五)

比良連峰と竹生島(右)――尾上にて





高島の

阿渡川波は

騒けども

我は家思ふ

宿りかなしみ

(巻九一六九〇)

安曇川

沖ノ島方面を望む(三尾崎より)

近江^{あふみ}の海

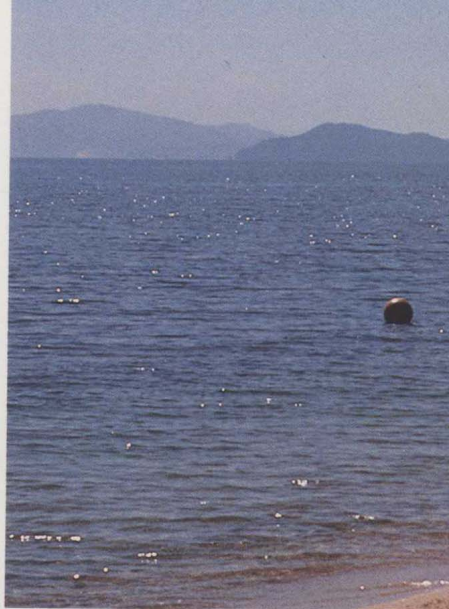
沖つ島山

奥^{おく}まけて

我^あが思^{おも}ふ妹^{いも}が

言^{こと}の繁^{しげ}けく

(巻十一―二四三九)





勝野の原

いづくにか

我が宿りせむ

高島たかしまの

勝野かつのの原に

この日暮れなば

高市たけちのくろじ黒人

(卷三一・二七五)